

平成 26 年度サバティカル研究者（ A ）研究成果報告書

平成 26 年 12 月 10 日

福岡教育大学長 殿

所属講座・センター 美術教育講座
職 名 教授
氏 名 阿部 守



研究実施場所 沖縄県立芸術大学
Akaldiulu(マレーシア)
Universiti Malaysia Sarawa(マレーシア)

受入教員の職・氏名

沖縄県立芸術大学教授 田中睦治
Akaldiulu(マレーシア)主宰・ディレクター Juhari Said
Universiti Malaysia Sarawa(マレーシア)主任講師 Mohd Zamhari Abol Hassan

研究期間 平成 26 年 5 月 19 日 ～ 平成 26 年 10 月 31 日

研究題目 美術表現における「永劫回帰」についての研究

研究成果概要（別紙のとおり）

研究成果概要

1. 研究の目的

研究者にとって、「永劫回帰」は作品制作におけるひとつの重要なテーマとして存在する。哲学者ニーチェの論説では一経験が一回限り繰り返されるという世界観ではなしに、超人的な意思によってある瞬間とまったく同じ瞬間を次々に、永劫的に繰り返すことを確立するという思想である。— (Wikipedia より) というこの考えは、彼の世界観の「肯定性」から発せられているものと位置づけられる。また、仏教思想における輪廻の世界観にも通ずるものでもある。ニーチェ自身もこの問題に関しては詳しく論究したものはないが、ニーチェの人生自体がこのことの検証であった、と解釈することもできるかもしれない。

ここでは、「永劫回帰」を巡り、本サバティカルの対象地域として訪れた地域において、如何に自然・文化を経験的、実証的に作品制作に反映させることができるか、について研究を進めた。特に沖縄地方の八重山諸島とマレーシアおよびボルネオは、初めて調査研究を行う地域である。その風土を調査研究することおよび人々の生活を知ることは、アジアの美術表現の重要な一端を明らかにできるものであると考え、目的として設定した。嘗て研究者は、中国、韓国、インド、バングラディシュ、ネパールのアジア諸国で作品制作を行った経験を持つが、この度は、これらの経験を活かしつつ、現地で調達できる素材のみを使って作品展開しようと考えた。サバティカル期間後半の9月26日から約1か月間に渡る会期でクアラルンプールにあるギャラリー・チャンダンにおいて本研修の集大成である個展を開催することも研究の目的の重要な要素である。この経験的取り組みが、研究者の永劫回帰解釈への試みである。

2. 研究の内容

サバティカル期間の全体計画は、5月19日～23日、7月8日～8月31日、10月16日～31日の期間は本学における制作研究を主体とする研究期間とした。

5月25日より7月7日まで、沖縄県立芸術大学 田中睦治教授のもとで、琉球文化、特に工芸を中心にその歴史と地域の関係性について研究した。その間、八重山諸島を調査研究した。石垣島・竹富島・西表島・与那国島に行き、そこの民俗学的調査と歴史を中心に研究し、陶芸・染織をはじめとした工房を訪れた。それぞれの土地の素材に根を張ったものづくりの伝統は、歴史的背景をベースに素朴ながらその装飾に秘められたデザインの数々は、南の島ならではの独自性をもつものであった。また、それらは人頭税をはじめとする本土からの搾取された歴史でもあることを改めて理解できた。

沖縄本島・渡名喜島・久米島では、琉球の伝統的文化を博物館、資料館を中心に調査研究した。本島では、宜野座市立博物館、佐喜真美術館、南風原文化センター、名護市立博物館等を訪れた。印象深いのはそれらの施設のすべてで沖縄戦の各地域の記録が客観的に整理展示されており、改めて沖縄戦の悲惨というべき歴史的認識を深めることができた。また、沖縄県立博物館・美術館では、丁度「鎌倉芳太郎展」が開催されていた。本土から赴いた学者・工芸家の鎌倉の沖縄特に染織工芸に関する業績の偉大さにあらためて驚かされた。また、沖縄の社会運動家、謝花昇の論考や民芸運動、柳宗悦らの沖縄への関わりを調査研究できた。この沖縄において「永劫回帰」を考えることは、柏崎栄助の足跡を辿る目的もあった。琉球漆器にとって柏崎の地域産業へのデザインを介した貢献、またその生き方は沖縄のみならず多くの人々に影響を与えた。なかでも本学での30年以上にわたる学生指導は、バウハウスのデザイン思考を反映させたユニークなデザイン教育の実践であった。彼の著作である「沖縄日記」を参考としながら、どうして柏崎が晩年まで毎年沖縄の離島を訪れ、自然と人間の営みを見つめていたのか、また自身に自然の過酷さを意図的に課し、そこから得られる「生活することとは何か」について考えを巡らした点を検証した。この沖縄に対する姿勢に関し、60年後の八重山諸島の現在と当時を比較することから「地場産業とものづくり」に関し、南方の素材の特質と豊かさに関して素材体験

を踏まえ制作研究した。なかでも「アダン」と「ビンロウ」の加工技術について学ぶことができた。以下の図版は、与那国島にて「クバ」で制作した生活用品。



A 与那国島にて 水入れ器 (クバ)



B 与那国島にて 鍋敷 (クバ)

9月1日からは、芸術家Juhari Said氏が主宰するマレーシア・クアラルンプール郊外のAkaldiuluにおいて作品制作を中心に研究した。初めて訪れた東南アジアでどのような展開ができるか興味が尽きなかった。最近の小学校の「造形あそび」は環境を活かした、その場からインスパイヤーしたイメージを大切にすることからはじめるサイトスペシフィックな作品創造が主流の考え方となっている。大学の授業においても宗像を活かした大島での授業展開を毎年試みている。この学生たちに課しているものと同様に、初めてのマレーシアしかもジャングルの中にあるスタジオ(研究所)で研究する点が楽しみであった。この度の研究期間中では次の3点を巡って「永劫回帰」について追究する。

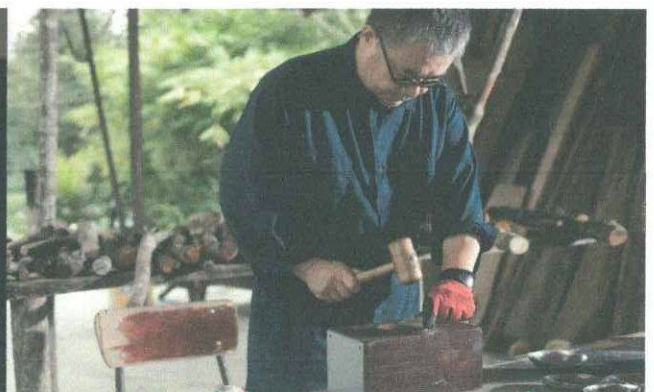
- i. 日本からは素材を持ち込まず、完全に現地から題材・素材・材料を探しだし、今までに行ったことのない

作品展開を試みる。

ii. クアラルンプールにある有力な現代美術専門画廊として知られる Galeri Chandan において9月26日から10月25日までの会期で個展を開催する。

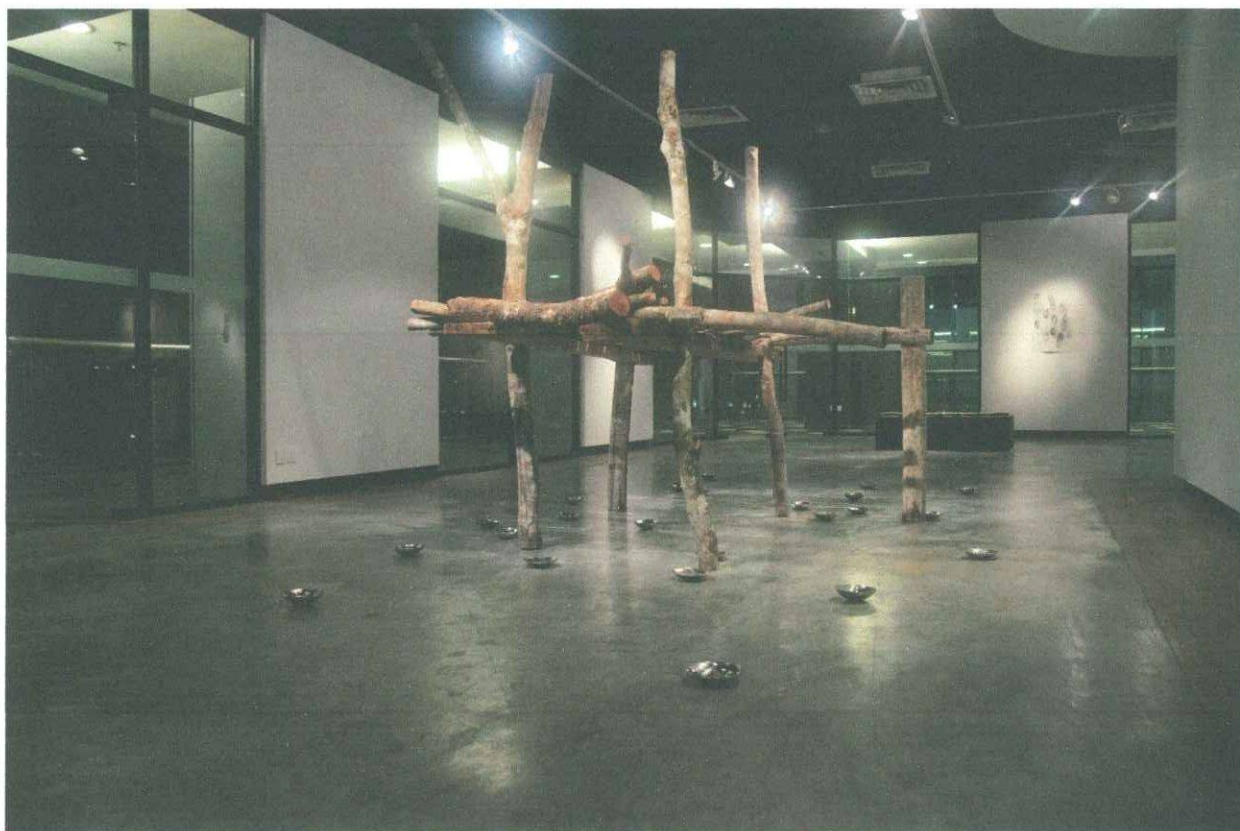
iii. サラワク州 Universiti Malaysia Sarawak の芸術学部において創造に関する講演を行い、教員・学生と交流を持ち今後の交流に基盤をつくる。

【iに関して】熱帯である。完璧にイスラム教の環境である。クアラルンプールは大都会であるが。スタジオは全くのジャングルの中である。この大自然の中で作品制作の糸口をまず探った。空間芸術としてのインスタレーションで作品制作してきた私は様々な状況の下で制作した経験を持つ。しかし、はじめての熱帯ジャングルの量感に圧倒された。知らないところへ行き成り放り出されたような孤立無援状態からの作品立ち上げであった。空気の清涼感は最高である。川も水も緑も美しく、多くの動物たちに囲まれた環境である。ニシキヘビ、蠍、大きなトカゲや猿などが身近までやってくる。綺麗な鳥たち。家畜たちも生き生きとして草を食んでいる。植物は青青と茂りそれらに覆われての生活であった。この自然から獲得したイメージをどのように作品に繋げられるかをまずじっくりと考えた。日本では、鉄を主な素材に制作しているがここでは根底から作品スタイルを変えて臨むことにした。今回は偶然の出会いから、錫 (PEWTER) を用いて作品の一部にすることを決定。ジャングルの木、木の実、葉それと錫から成る約3週間にわたる制作に入った。錫は100個皿状に鍛金し、その中に、溶かした錫をゴムの木の実の殻などに铸込んだ铸造オブジェを組み込んだ。さらにこの皿をゴムの木の倒木をジャングルから運び構造体を組み上げた。



【iiに関して】一般的な日本の画廊の広さから考えるとあまり類をみないほど広い Galeri Chandan での個展である。次に図版で展覧会の様子を示すことにするが、クアラルンプールは予想以上に大都会であった。今やアジア経済の中心都市のひとつであり、町は活気に満ちていた。日本、取り分け東京の現代美術関係商業ギャラリーの多くが経済の影響を受け閉鎖された状況から比較するとマレーシアのそれは活動的で若い作家たちを育てるためのいろいろな取り組みが試みられている。さらに政府の文化政策の手厚さも経済成長に相まって特徴的に感じ取ることができた。例えば世界的な規模で行われるアートフェアは、日本では存在しないに等し

いのに比し、アラルンプールのそれは大々的に世界中のギャラリーが集い毎年定期的に行われている。お隣のシンガポール、インドネシアやタイのこの分野の状況はまさにアジアの中核となっているといえる。



A

マレーシアは、錫生産が重要な産業のひとつであり、世界に向け錫の工芸品を送り出している。なかでも ROYAL SELANGOR 社は日本をはじめ世界中の高級デパートに製品を送り出している。この個展には文化的後援として材料の貸与を受け使わせて貰うことができた。この作品は「OCCURRENCE」と題したインスタレーションの一部である。材料は、木、錫（鍛金）（鑄造）、水を使用。— A、B



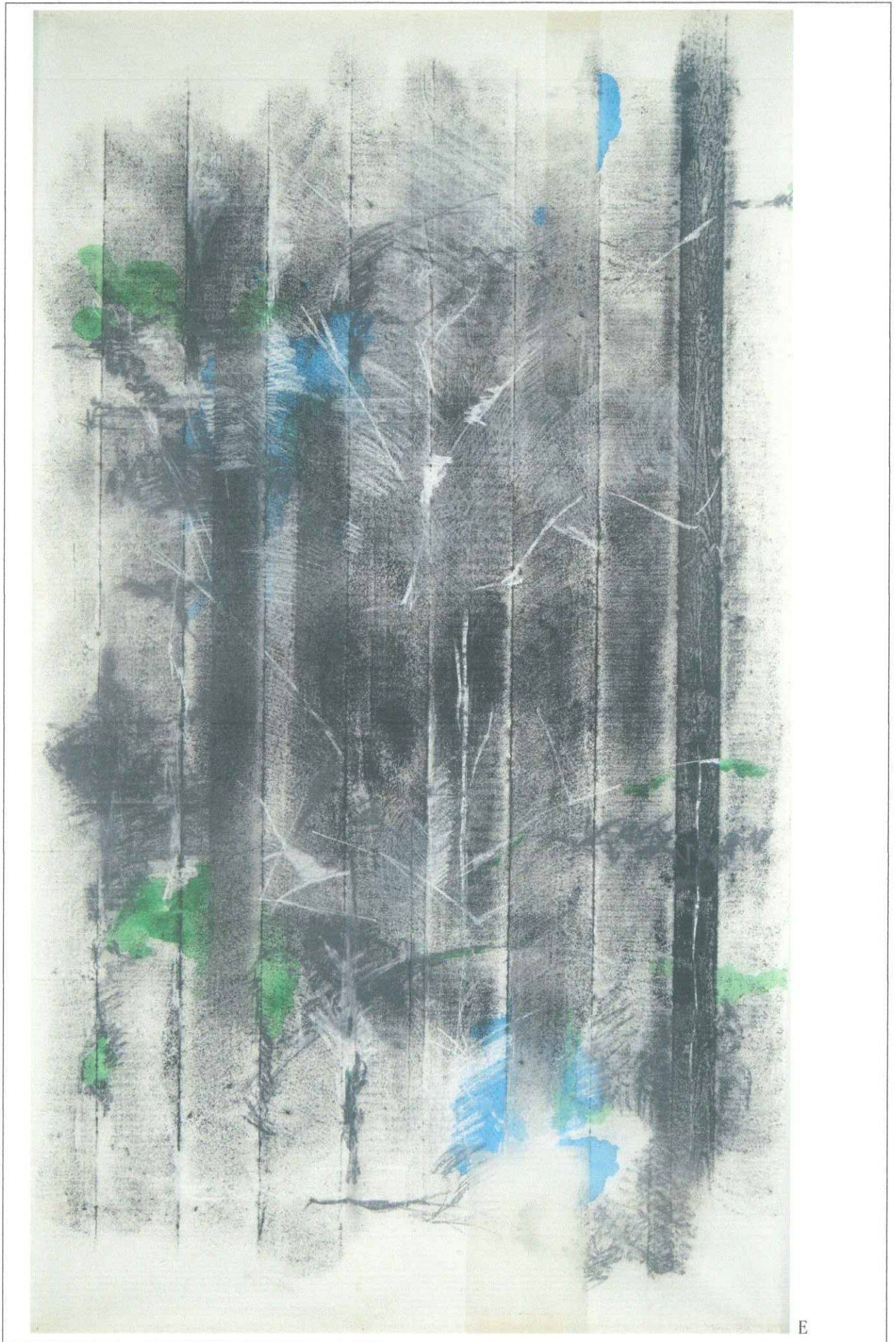
B



C 「OCCURRENCE」この作品は上部が回転する。枝、錫（鍛金）（鑄造）、水、枯葉、木製椅子を使用。



D

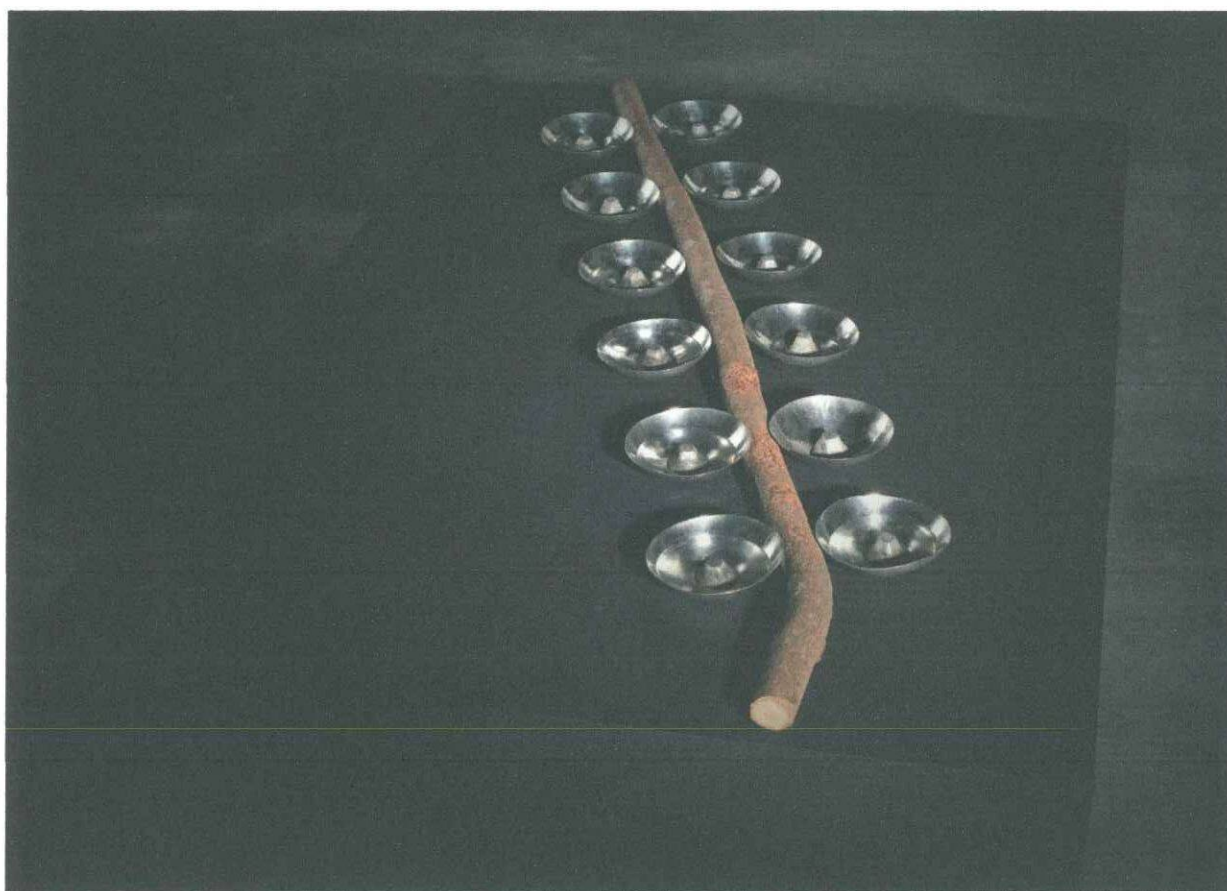


E



F ギャラリートーク

G オープニング風景



H 「OCCURRENCE」

E はドローイング

【iiiに関して】サラワク州 Universiti Malaysia Sarawak の芸術学部において「作品創造」に関する講演を行い、教員・学生と交流を持ち今後の交流に基盤をつくる。— 日本ではサラワクというが、現地では「サラワ」と発音。サラワ大学は、広大な敷地に様々な学部を有するボルネオ島内では最大規模の大学である。芸術学部はデザインからファインアートまで幅広く網羅された編成であった。福岡教育大学と比べ規模の大きさに圧倒された。大学美術館では学生の立体作品の展示が行われていたが、セラミックアートはオブジェのレベルが大変高かった。トルコや中東地域との交流が盛んに行われている。今回は滞在期間が短かったため、学生指導が十分できなかったが個人的に作品のアドバイスをした。また、講演会では、わたしの作品の解説とともに日本美術、特に縄文時代の土器や土偶についての話を2時間程度実施した。大学から最も近い都市であるクチンの町並みは大変落ち着いた。様々な国の統治を経ているため個人的には台湾・台北の淡水のそれと似ているような気がした。民族学博物館や伝統家屋を集めた文化村はこの地域の生活を知るうえで大変貴重であった。



写真は、サラワク大学キャンパスと講演会の様子。教員スタッフたち

3. 研究の方法・進め方

永劫回帰を巡り、作品制作を通じて探究していく。結果を得ることは永遠に無いかも知れない。しかし命題の解明に向け、弛まぬ制作創造の努力を重ねる。サイトスペシフィックの展開を続ける。まだ行ったことのない場から受けたインスピレーションをさらに鋭く先鋭化して作品に繋げられるように、理論と実践の両面から研究を進める。様々な国の価値観を知る必要性を今回のマレーシアで思い知らされた。また、各国の宗教の歴史を概略としてしっかりと学ぶことも重要である。

4. 研究体制

現状の体制を維持して、個人として研究する。できるだけ外部資金の獲得に努めていきたい。

5. 平成27年度実施による研究成果

- 個展発表2回—神奈川県および福岡県
- ヨルダン・アンマン国立ギャラリーにおける企画展に参加
- 大学美術教育学会における研究発表
- 論文執筆—大学美術教育学会への投稿（査読付き論文）

6. 今後の予想される成果（学問的効果、社会的効果及び改善点・改善効果）

現代美術としての表現範囲を拡大し、社会との接点の多様性を模索する。また、造形教育の分野で環境と結び付けた教材研究をさらに推し進める。そこから質の良い美術教員を育成していく。

7. 研究の今後の展望

国際展への参加と英国KEW GARDENでの個展の準備に入る。

以上